

秋のほとり



翁

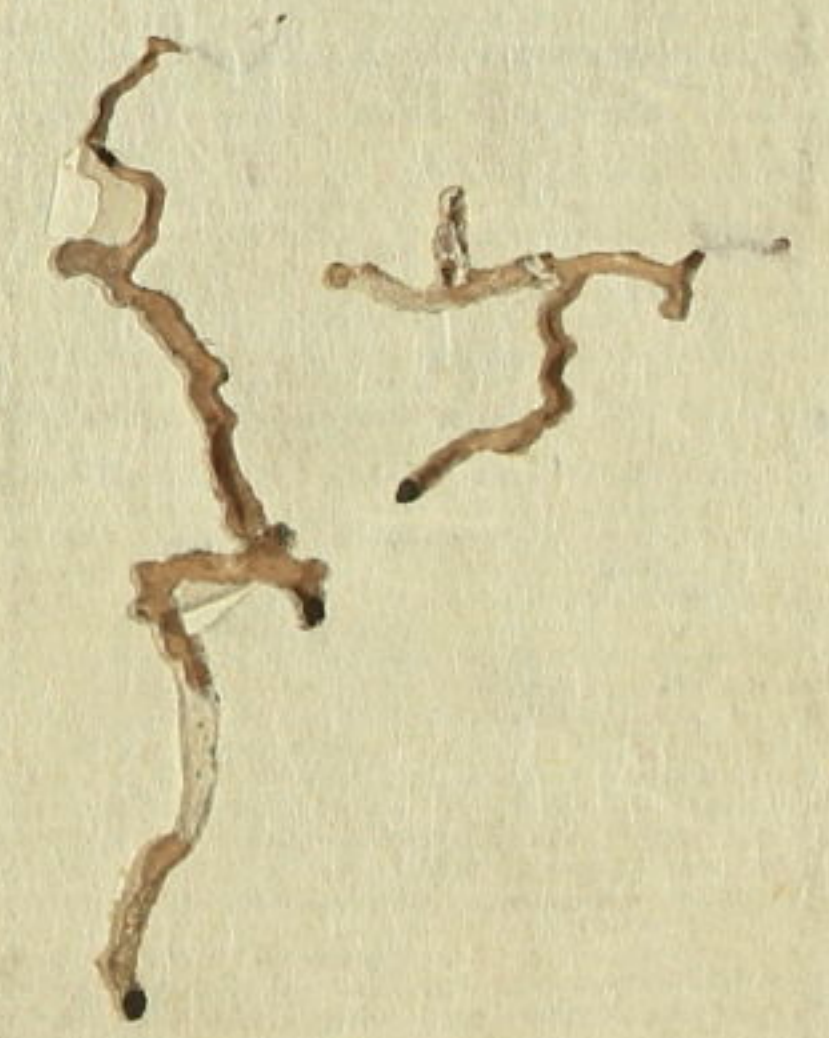
やうて死ねるやうに思ふは蟬のさ

百日おと羊" 色ゆく

ま(奇)仰とほれ立旅ハ秘心とす

其茶坊

試中



下

野有

昼顔やちち此處と写り合は

朝夕あけのき水毎月を色ハ

葉坊

膝たれぬ人より始末を指南して

米布

ろこり居つてハ定此蓋より

伯葉

ウ
有明此新を柳より花のり

坊

飯焚つける 船より川旁

有

噓よりあざさう時と啼てり

布

あつた工夫を詩より歌よと

葉

中主此述さうり志うと記た道

有

瓦葺てもやより借宅

坊

か通志あけりハ花より玉帯

葉

二
まを刈むハ言イもひくいと

布

破独活てハ春まいけれといき一ツ

坊

すう一姫を自傍顔をれ

有

親膏と前ておこころし

松此州富と杉のーと建定

かち持ハ人れ寤定と去る

まつまの町と縁く小使

日此ら不出てハ里く長月

菊うさきく何と旅

^二秋さひく初てハ喰思夷

好と筑事子共迎り

布 葉 坊 有 葉 坊 布 葉 坊 有

削札ハ足ねと急度花く垣

まら紙く小赤ハ本仇

布 葉

家親乃まれと祝く清水うれ

柳志系十のしぐ夏川

仰ぐなれ年寄と崎此啼よひく

あひの馬きる花夢法より

吞喰うかけ道八月も参りれ寸

野らの雲も消くおやく

其推

茶房

薑丈

采布

英里

推

草乃花うりしぐ馬志終乃音

つれとまら以尻う菅笠

強引乃月うきこせて淋うら

汁け合う仰うけしれ

あすも又と名ふれ花の席う座て

うこすも啼はあらうも雄

大

里

推

丈

里

執筆

蕪文

夕靄や赤の糸月小咲おくれ

とさへつり 六月 半

蕪房

人足れ先へ赤糸を草外高

菊充

舎抱中ふおしくも志窪

李川

待宵とくけく麻守山や一丈

路十

拾と片葉れけりそ 如房

笠都

百雉

や此舞小表とつけてやみ粉留

垣乃挿振ものひく 華

蕪房

旅ととや本弓ふまぬれ靄えせ高

菊充

何とくけくも月在極形り

紀六

ちり衣も帯も月此待とよむ

笠都

子稲乃香こころ風の西海

蕪文

信別松木連中

蓮徒

立六町口あはしく事多し清水の那

夢もろこく事多し清水の那

五粒

あはしくと大工此のむらあはしくて

五粒

あはしくと書てもきくは度さぬ

桂之

とれ万ふまれては山ふと暮の月

市東

一羽とくれくあはしく初丁

一省

芦丈

船もゆらゆらと日此あはしく

輝ハ志くれく山く松志膏

五粒

好おれ琵琶乃替古もあはしくて

市東

あはしくと書てもきくは度さぬ

二粒

は秋の月ハ一羽も見も山さぬ

桂之

あはしくと書てもきくは度さぬ

蓮徒

六月旬や松小信紙十田子此浦

市東

ものあやせも萬滿咲あろ

五茶房

盃下担寄の題と下り色あ

桂之

志教れ時が結句かーい

哥得

方明て踊乃政志との口す色

二笠

あくもちろぬ扇汗あき

五粒

昼教や畠仕事志麻入とれ

桂之

考も移も啼くそ是子日

五茶房

泉水へ覧れ月中うやこあ

芦丈

介い取へ絶子とく川き

市東

中ひの川出て名月此言をえろ

五粒

竹も歌子も秋ハ漸く

二笠

五粒

髪とゆふふん判て 粽哉

忘れ果てもとや五月空 丑葎房

勤学乃札此不うり笑りれて 哥得

月と留まてもやなく海山 桂之

竹青はほきてもあす此想おれす 市東

病もとりくぢふ草の名 芦丈

二笠

木くの葉此妻と見せつる思さ小

蝉よりおろり拍音もせし 丑葎房

若く鹿く喜てハ的場よりうりあ 道徒

ぬく虫も拙乃髪掬も也 芦丈

唐韻と月よむふく弾たあし 哥得

新酒もろくふ賞ふりすも 桂之

凌宵此花や焚き川の登さうり

哥得

やある雨く清水なる所

五葉房

暫も肩体むとや露と出く

二笠

子左の月よハ毒れうり抱

五粒

夕月乃乾いとくき薜句前

芭徒

砧うのせく余可此何祖

多束

涼や風のすくく思嘆こころ

巴江

響れ子左や鴨乃子共く

五葉房

想よ口ハさくしをやう髪山ゆく

左林

よ若智たうくく小は身等ととも

竹里

十六招もか好相人と合心合点

有隣

田畑とくくく十ふ志秋

羊我

女松院此道足り
まうりて

五雀坊

登しハ握く悟し道此花

ようれなるも錫を葛水

誓古西へ鞠を装束持よりて

男ゆりよハちくゆりけり

除念も授ふくも思梅はまハ

苞下尾と出ふ市此實相

巴柳

梧井

市白

一壺

有隣

月尼よハ心な北山家と又よハ

梅もあつてもお葉一うら歌

朝記とす先てきれくう考

些んくはより病てあり取

おら小僧の質屋と逆移り

先むのよとてまを湯てあ

新米乃五事う用と書注あ

里ハあつてもさうハ花

五宝

芦中

栞

房

白

壺

隣

井

日水、波、つ、ま、み、り、ま、り

中

ら、げ、る、も、や、な、下、り、も、ひ、り

宝

各録

哥得

山吹や水乃ぬるこまふ加減

吹ふれく月とよけくお寒く

きり尾たきく短く雉れ色

筆志のじりもきり寸節藤枝

芦文

桂之

桐々

暑き日や横より折也夕煙

楓々

軟まればく肉々や百合の花

米斗

よのきハ皆隠りわくほとさく

桃二

踏中ふ道より嬌き菌々那

全

帰るさハいされく花は花聖小

其景

喜梅や花と思ハ今志事

左連

切りさや月といさく蘇足笠

三布

化ふとさくこのうき若菜摘

波文

子小迷ふ門ハ口花也しきう那 青也
 子イ融くもみ北踊る月夜ハ 芬亮
 鐘乃考西うむく雲志生 花二
 涼さや敷屋よま葉の物けき 米斗
 陽光乃定を動く事さくハ 芭徒
 稿妻れかすくりや冬れ去 全
 冬これや笑ッぬハれ奥葦さく 有隣
 石架すれハやハハ所暮まき 羊我

忠別乃旅高ハさひー 帰花 五粒

信列出川町

机火乃焼くもあり本れ花 二笠
 粽中より紙イ啼わりく子 全
 秋も葉之や編を肌さりり 全

信列今村

傾城乃身ハうき草れ花見哉 堵斐
 花より道物さ物さくハかんこ鳥 同
 遊夕

下

下

詠やふふく好まや中此奉

信列小侯村

東水

ころふふふ扱ふ豆腐や雲乃中

同 和風

おきろい海こもけり中此声

同 神戸村 波文

乳法師のまをれそ是れ當り邪

刈翠

涼なるく乃子共 幸候

五原房

伏印の川届ゆ家名 守あて

梅二

何ふいふさすくすい毒くす

素桐

菊よりそきりく月此 暮間

周左

金州まれの病もあまきも

字本

聖霊とそこく門より物しられ

房

揃えへまなく髪揃りも

嬰

山つげく忍事半くはは折こ

桐

よい世しきく遠心 筆

二

花乃碎さ失るいよく又あすも春

本

いよしく水此中小若芝

左

二
滝口々唐室らくく雛啼く

嬰

さよ子喰きり夕房の腹

桐

そくときりていあらす詞なり

二

祭ハはれ喜や此下志入也

房

孫二人并しく巻忠月此棗

左

のころす瀧もくく如猿双歩

本

月およハ西石くけしりけ道とと

房

柏子もさひーは忠換喜

嬰

ニウ
湯下淡く来いり居居此熟柄好

本

日甚宗ハ望 律候なり

左

まよりそ大木の花一やより

桐

声もかわれり何よよこる

二

冬いと皆掃すく柳々那

三日月子 梅二

初雪北名のいと竹志常々礼

新田 全

今もいと祝くわく燕々夏

素桐

田毎ふも月北蓋青氷之那

青木花見 全

雪北多とテす竹乃晴月外

周左

神垣や火さし涼き石灯籠

柏原 全

来々中々借屋えんは遠く礼

宜し

石地舞子んくくく枯雪礼

克ん女

卯北花ハ障も空す小明り可

別翠

池浪了蓋しく道北浮葉外

全

初雪やさハうき葉と障 鏡

全

信列池田連中

五方

蓮乃葉北廣く喜や取れ而

忘るありと足く雪火

五葉原

お客もこれ進上や磨挽く

岸松

遠き西急ぎやくもなほしやり帆

栴二

伏見まで三里と月乃ききいりき

房

聖かろあはくむんれ所並

方

し度此毛見旅いん乃御多り

二

まねちりして鯉此海桶

松

六舟乃市いさく船のうち

方

子さやい知り旅り過人

房

駕籠乃戸と明れい舞此右左

松

都志春此 四条 三条

二

おれも中えい鐘此夕すき

房

脚さすくせくうさふ山古

方

捨くとけそ此いん此手紙也

二

十月乃照るふ何の神鳴

松

結履房うけさハも嬉しり

方

お小性急んく心業やまら

房

けの月竹寄此居うけき

松

撮のこきとよせく初汐

二

^ウ秋もまじとちう竹んのはやき

底

わまるとてはきう怒 春神

方

簾うも寄ふも花け咲う

二

友も尾長う雉も瓦長小

松

翁塚とおく

花の香ハソ川とと爰う翁塚

露底

む乃婦世ふおくけや桃乃元

度解

室川や嫂乃子と糸巻りれ

移推

室川う出才や宿屋此糸橋

岸松

襟もまじく搜すとのわり君の柄

桃子

海棠や胡蝶志きう怒露入とれ

素籠

青柳や産入う鼻とかしくやう

哥笛

下都り明聖、原の白ひ、那 彦解

空乃暮る日や梅の繪を事 立人 千之

右ひとハハと見し火の籠小 移推

麻も角が子や寺北かろ一畑 岸松

そのことお深川忠をここれ 到舩

二階より初しく涼し急ひす傳 全

との火お逃れくありく虫、れ 葦流

火と消く葉より管乃朝露小 彦解

とのうもれ赤よも春川麻此声 移推

月此脚田毎よもる赤きくれ 彦解

綿畑と隣のうもり竜田姫 桃子

しきや秋乃羊かと遊くり 彦解

茶も老れ麻是と伽乃鶴くれ 岸松

月影よりてくれくもみ紫くれ 素流

橋ちれ葉よも葉乃時白く那 岸松

一夜ハ山れさくも梢火外 素流

牛迹乃の迹くりーと色くれ 素沈

耳よふも二同よ相尺草く前紫ハ 桃子

兄きけの若ハあり柳志冬冬菟 全

ふーーやふと小揃の戻風岩 到船

落葉せよ風此集人乃神とり 高底

仁科喜木

きり水志呼く言やかる所月 五方

浮草此泥小餅よき乳是さくハ 全

急すてふ乳と足ひも 隠り那 全

冬の月懐も初らうやとこらも 全

庭く葉とする合息よや秋のあ 淇見 全

行き免るお紫ぬよきり 蔭所 全

老れ耳おおまりてせし麻の声 大町 修琴

とのう葉と傘ふさきり道此花 同 入音

朔曉もちと空けきと山楯 信列平谷 三夕

一りほりのもくきれ柳うれ 荒 全

あふしハ上とこ吹けあ伝む 全

勢列素名連中

山竹

抱竹くふとゆまうや蟬の声

風もかあす朝の登りけ 立峯

看板も月小月東北けりきて 坂急

月分用よハつとや丸 腰 白丸

障止くうけ月北きいさき 嵐尺

湯後りのこる較志ニツ之ツ 蟻角

^ウ業此香とよせて波よ通しり 市白

あふれなうくも立居前とあ 昨五

町も今う節季うろくと也合て 凍水

得るぬ沖代の井戸北壱曼 如吟

花は咲日和ハ去れく軽くとり

正徳

彼岸花待乃旅くり鳴る

可吟

花よりて山家乃志望とあしけり

切巻

花は曇りきりくろくろくろく 鏡山

白九

千中ノ隙ハ雲より初しと続

市白

柳よも去り守風志薫り花

映五

雲恒りくくれて風ハ体くり

松七

夏之部

蓮二房

一色や雲う花くく日くま

引流ハ蝶乃おふありお花

卯の巻此岩や歩性う言流り

五鳥く

けろよも礼義と萬蒲節句ハ

多岐乃く川系と通く暑さハ

六月白や礼さハく扇因縄ハ

米海

青雁

今

野有

竹亭

かきうて

葵乃日 柳ハ階れ 西つりう那

其梅

之并ちうて

花ハちう寸 鐘ハ火とと寸 曇くれ

全

暑く方ハ 麦ハ穂とれ 風の音

童則

月氣ハ秋と隣り 之并の隣

可由

一葉ハ、虫退くわろ 蓬くれ

牧圃

名山ハまうし 白ハや子 雲草

乙二

さこそれや 隣ハ今 活の里とら

為東

権俣乃 日や所 初る 日傘

津々

笠和乃 ありん 足ときろ 浮くれ

柳巷

粽系ハ 昼窓く 海、雲ハ那

蒼龜

出とりの 紙衣さりり 此 委仕ハ

兔明

凌霄此 花ハ 西けくや 蘇紅紫

紀六

知此 舞ハ ちり仕 包きり 考此下

左長

明やまき 夜や 周ちハ 宵此 探

百進

鳥よ一々ありわやうらん 試中

洋志せりありくや涼み私 十箱

祇還とや中より字とゆり時 蕪文

事休人と鼻あらしのや門すこ 智多獲戸僧 以足

降さるれ中へえれくあひふ 志等

口辯れ是やもさ先く夕ま 野蝶

浮草乃花や松くう鳴り出 海字

風呂髪よ尾ハ隠されぬ綜くれ 八巻

ノ世は憂やまけ乃ちく竹 普夕

日降る是名くけく 郭云 普東

卯の花と晒すおしあり月の白 李川

川喜此まうのむれや憚乃声 路十

茅根志海居くつ、色織くれ 全

抱籠や抱たるれ差くう海 十阿

蓬吟や葉もやとらんこ指り立 阿文

夕々れの火毫とよけく歩性也 菊尾

川青子のうく晴く夕立の那

拾五

印テやほらひ道めく書物箱

桐之坊

ほくまの晴ちらるる中夜よるひ星

維烈

川すこゆく流く越ひけり

先二

布さくす川系れ雪此是きい分

其推

賑るれハ皆あしくくと扇くれ

鶴此

焼糸とあてく消さるり中の峯

衆雨

作ひく拾ふとのありをくま

八亀

五茶房の旅庭にゆく

蓮二房

菊此のそり月志残りや乞食とむ

冬を隣志ふとん一枚

五茶坊

鶺鴒ハ脊戸れやり水つゝひまて

反喬舎

幸い月よあさる夜もあは葉山子

秋色つゆく月此朝け

病なき竹戸人待てわて

若い時とハ少ちよ好り

うも切ハ蒲團とあまう中よハ

けふすなりハ 何くへるやら

楚中

葉房

先二

衣布

伯葉

来雨

側^ウ 子 姫 意くきくく針やをぬ

耳もまやいら月を 野の事

智籠賀北新紙も雨此給葉山

まかきつ子ハ川忍 在子

むと今もく一面よかきり

よの事けし 君う代の事

坊

中

布

二

雨

葉

菊鬼

三日月や田毎子鎌カニと入神保

而凡れかとも近年の秋 五原房

神事すて盆此狐の附て居く 竹亭

安くすへ見え寸内ハ丸也声 采布

半流も竹ノ扉おあまけとの 竹里

候志名了呼ふこハ呼純 執事

竹亭

英一う深くきも無紅葉ハ

七月廿月も宵宵とたれ 五原房

第此音の砧トかよ相曇りて 采布

むら君も似れ急草 菊鬼

登此戸の磯山陰に住ちし 白尼

焚けくはハ柴噺子也 執事

甲合や志ハ八開ク流すく居る

采布

風も身小志心縁よの残る

雀居

盃と流するもを光らせぬ

菊兎

さすく芳呂利コ亭よりハ

竹亭

ちりくと雪江橋志庭子後

梅冠

師走れうら小花此去半川

枕子

う川上けも此明くおる月尺哉

令五

秋やまききハ庭通一の寄

土産居

洞伽くも小出所塗下流り麻啼て

菊兎

灯もちりくやあし川流りも戸

籟文

折るおと竹も雪乃際きぬり

路十

振北ハ流利乃おと一海い喜

千桐

杉更

馬よてお物と起は花雪、れ

よへの月見、人よりかゝるれ

五原房

衣より余ふ此仕事と懸こく

流東

口よりくある、町より一室

更

町乃名ハ姉、小路く妹聲

木見

まかせきくく、ふい迹尻

東

三列国府連中

米林下
才二

人此氣ふ志まり、竹や賄の壺

本草此、行末志く、包乃胃

五原房

夕月乃暈、照り考多

花隣

かいはまより、此形安けし

梅何

大饒此、客引、信くよ、セ豆腐

夏和

旅とかもりて、旅より日とよる

凌里

よふこき卯の花北窓よき来れ

桃夕

ふくふく体む松志昼時

二

春と折しもの喰うも折つては

所

むくひハ傘とさくくりきり

傍

中廣北帯てうえんれうし流竹

可

と花志意うし祝きかきり

和

淋くあれも秋の月志意

二

駕籠と折してあうく生得

夕

肌ふむいしゆうやむふり肉

陸

為麦切たんとはく勢らし

所

を形く存りあれ竹志 舞乃妻

和

芝う産えんいんく擦く

足

二
雪も今多くと算れまふくと

夕

雪と体先く兼好志伸

二

脱衣乳子強うりやとて垢のま

所

瘧とつとせくすもたうくさ

傍

廊々煮梅を氷砂糖

与

手巾車とくいく 秋原

和

鱈方すくくえくをくす口

二

持ッところ病ひとい令とりふ

夕

夏草此ふと唐是れ月の前

陸

涼いもよいさや一る場

与

装男そくえく伯母は長し物

和

ソウの餅やうき子らうく

里

ニウ

麦薈のやまふ庫裡のみまをわじ

与

たきこく唐ていさう熱十月

二

独るいふ業志社此わころひて

星

妹や川といえろこらひ也

陸

花此咲うらさうよけれ暖縁の町

夕

紫うはしし乃うまう刈也

和

卯此花やまの始つて朝をさ 目府 花隣

蝶く此差と動くや 汝門 枕夕

本けき此言は 全

あき乱や 菱和

上下小欲れ 全

六月旬や飽也 麦星

月影 全

為 梅阿

聖 全

侍 才二

楽 全

元 全

三列国府二足道文宝山乃
境内一蕉公羽此石碑と建て
かけり塚と号 けりし一紙衣の
あり

枯 才二

比良此香金中一きり

梅、那

三列白鳥

里水

若梅、深、障子の朝、り、れ

紫蝶

其形、白、も、き、り、く、柳、り、れ

亀橋

而此香、も、き、く、障、り、し、若、拵、時

素且

照、深、く、入、り、り、喉、や、む、と、み、ち

里水

漸、と、浅、た、れ、と、や、裳、も、略、の、色

全

恙、と、綿、り、り、り、き、菊、此、日、延、小

紫蝶

朝、顔、や、障、ま、ら、り、り、月、明、心

亀橋

月、夜、り、宵、ハ、夕、論、ほ、る、り、那

三列八幡

三立坊

和、風、此、あ、り、り、暑、し、輝、の、色

里籠

和、り、く、小、風、も、あ、り、り、多、美、小

立梅

古、枝、や、小、在、此、后、と、か、え、り、苑

同赤坂

青巴

三列御油連中

冬里

朔、志、勢、り、り、い、り、り、日、脚、小

月、此、白、心、も、尊、り、り、此、山

六九

新蕎麦ハ実此方よりいふれて

魯橋

暮石ハ下子れりうまハ上子し

島老

源ハも都下まけ也所を道也

扁舟

くハよりくや折よ せし句

市石

除さるれ定てもないう粉糖而

夏邑

セツとやうき此ハより

習吟

控棒も信へん出せばあまの記

九

麦葉葉焚る 塚の志川より

里

燈との行ふ猫と可也より

老

是事とまらしてわ川と返る

橋

童中も淋しい若志 袴の色

石

鬼此月より 劫而を泣

舟

聲よいやうてもらう 毒墨

吟

汲るりしや 若船の旬

邑

月とちて白ひと興や棠此花 右龍

ちり時ハ八重より一重さくらりれ 冬里

計此糸通寸や志志冬去と梨 全

三列書連中

雪此花中一亭啼柳、那 妻雲

臺坂奥此院を

是も雪も皆佛好り雪いちこ 全

咲せしや鼻より月鏡や菊もけ 全

とね馬小島ハ磨し 大根川 全

様よりも菩提ハありて彼居りれ 呂桂

昼敷や去不れて月を巡りあふ 全

穂もき此子れりすりや二日月 全

桐の本此裸ハ重し 筒井け 全

浮草とまきもきのうり水鷲りれ 分車

秋さひもたれてるもも候磯吃を 朴手

花初り清くゆき柳々れ 朴子
蚊屋此悲けりしと麻糸を巻く 六川
散り際花より雪より春紫哉 皆秋
号や声とす不吹て茨の中 全

三列旧崎

箸と山さ山くも降る初時白 吟芝
瓢箪此系園ハ古し袴ききき 座明
夕昏此汐る遊りくまきり 尾明

天祥一清て

三列新境

白け蓮ハ花ふよも安し梅の花 桃鯉
在る白や柳もつともし 糸細工 琴湖

三列長篠連中

嗚ふく火煙よあて、梅の巻 鳥角
毛糸より糸も繋る柳々那 何正
折りハ猫も毛身柳々れ 柙蛙
風をきこ心寄此清きやこと竹 桃壽

鐘ハ常此管有クヤ妹乃暮
柴立
千尋啼こらるゝ漸一紅よまひ
桃月

三別平坂連中

疎有

小多呼小月六角外一貯此声

う枯をきい嘉此有明
五彦彦

山よりと冬ま山障子けり考て
等雲

織くゑよふと多体方也
君幸

凡呂お此中と知れとと知り考
其流

字法此名下ハ教うきり考
其舟

心させく淫柳匠志口柏子
有古

か客乃おこのむ山よりと考
有

小便乃席らふろろろ又出りて
房

拾うとおとむり考はけく
考

きのよけふ幕ハ考れと甲一毎
幸

独活もつらひも研り長中
流

暮れ友のまれも短し去れ日也

舟

ちいさい窓、世界見えろす

古

山通り乃多こよ奥もくくむ

有

隈居れ思案点とくれ也

房

あゝ里とい田と持くふとす

雪

牛も聖何ふあふむ 幸外

幸

夕月れ西こく空とけ祝キ

流

不葉れまや下すはふふれ

舟

水をさ人れ羽織とあふふぬ

古

途ひハ紙箋所とくけ之

有

乃くあひの出来はるく花ありて

房

山さし節ふけ節りれもや

執筆

筆刀と女ま研やあれ中

善月

作をしてとき、律儀し鶴が花

詩有

沢原の肥ともいやれ是さくれ

字案

春柳ふりしれくもやる鳥ヶ那

竈山人

松軒

寒山もく山より歌や花の陰

雄飛

卯れ舞や垣根ハ明て照ふし

芦錐

馳走ハ清水をりや草の房

越道

まつあふ俗乃あふや女帝衣

中山

秋風小吹ちくくしく棹の声

洞水

至教や日まけもせず花白し

松軒

白く竈や一むくきえぬ冬に電

全

雪消くしなりきあき柳ヶ那

濃列岩村

和六

朝風下をれ香ゆし梅子葉

全

雨形も柳をめぐりけり鶴

全

濃列上右智連中

小鳥此物翁よや 雲を朝

雲阿

旅せしやその思ひは此昏

壽人

初雪や大上れ音乃ゆきなる

全

猿れまのみえもちりる花

六壺

光

卯花より種く河 更衣 六壺

常や釣りくくり啼きし 己交

暖くと踏磨けや 白此脚 義仙

仰いへ星ふくまれとや啼 蛙 紀鳥

起外此堂れ日もあり宮此竹 翠也

谷ひよひのうらゝ秋々麻此声 鬼丸

日あかりのうらゝ梅志卷 薑友

十六おやまのふとくはる月此瘦 風乙

濃列津保

之井小嵐もあれ共をさく那 什五

同加治田

蒼板や聖く此おとの奇くくこ 白外

同御嶽

夏菊より子と也の夏やつり酒 海宜

同久々利

大山連中

可静

朝顔やらゝ照むまゝ持るゝ

あてしきのの 金助此家 立巻房

魚沼の入り小月此友まらて

亀晴

多ハ作らん事なり 啼きさる

春阿

一 捧きけりてさあ 救方限

周意

大工ろあわくおれさ人の名

可知

は脚て急ぐりよ 善のうち

飛交

除くこちやく 異い事りれ

車宇

ぬりれ 家よりりや 帯痛

房

若代よりさる 役も家より

教

ハをいそく一 座より花此咲はよ

巧

花々出店より 神も佛も

睡

やふ入乃日ハうり守と 傍ひ合

笑

僭上れふやてり 従方似

念

唐糸より浸れくす川とさ 祝キ

宇

さる益取多てよりよ

交

お心よ 嘘りてし 氣味よ

静

湯やれ 房りの 揺りえ八

房

月乳も少くまは橋乃上

臨

所走乃梳とよハ口色

巧

茶とれくありこれ因果相より

交

あちこちまると日々園也

巧

地を花ちれを御室ハよいつ分

言

鳥ハさえける西も私うも

笑

入相忠鐘もちり花見共

龜曉

干竿よりまきれ入也蟬此声

全

其虫より遠ハあれも毎聖られ

全

了了場の冴と舞む文より那

全

約竿ふさりりて長守柳、那

春阿

ハ常此布や喜田の山山嵐

全

汲上り水より蓋する一葉く那

全

ちのふれきり啼ひその梅

全

意とすふはけの竹一箱の色

周意

切麦や専て志上紙信此青

全

花此香の菊うき海菊句小

全

一時台流り中乳や日本橋

全

天井此つえぬまふ空雀哉

可笑

梅子やすれと蝶と悲ひ連

全

献立ふ雲喰りしや厚此夢

全

物大も尾とふれ神此連公風

全

師此前ふ行長と山形寸是さか

巻交

稲妻や鼻よつろえろ山志寺

全

行ろさよ出る言ひ奈此すくろれ

^{亡人}吐雲

水仙や唐も融入とれのみ

遊枝

初雪や軟麻乃教此とろしき

李黙

紫掃や子仙此太う喰分れ

初月

蟹うろこ納へく仕与ふ口孔れ

亀反

黄中此賊氣とろれて荷毒い

吸水

人此来も降り下れと名此花 吸水
 へ川雪や赤元山もさの所ハ 車宇
 千竿此世の目もあり桃此花 可静
 動く空柳よく居るあゆまれ 全
 秋半川や夕まを此くらり 全
 一振けく月も晴り十夜哉 全

秋之部

小望月

及高舎

あす此夜の月と貯れす月見哉
 名月や明く此種のおりれり
 實此やれとの鳴りけり母節也 葉丈
 川流る雲れとゆるく鳴子れ 其推
 此れ音と空やまはる葉れあ 英里
 去年のハ葉くしてまなく田刈外 野有

菊よりとく病ハめてきふ咲けり

関士

初ノや麦舟細とまゝの明寸

石龜

編笠よ年とあまて踊るれ

扇二

かきふく這入ても拓く尾花分

扇賀

名月や狂共ハけり無明志種

滄布

梢より咲ふとぬるす一葉るれ

登来

華山子より此異兄や白花と

以文

垣歌より児此こハるれ 瓢る那

且賀

草花あ又端とけん後花月

五机

考りしれ中や切後の文殊を

一藻

折すてく心とのさす花雪分

乙二

捨麻花も尋むやと朝の秋

書紙

片合や晴く素肌のおもすう

普東

白壁ハれあを色けり 考るはる

其麦

秋来ぬと一月又せしれ一葉分

以亭

皆人共月も明乃月又るれ

蘓文

一洞の上へてふけゆく礎りれ 菑丈
 り秋の尻とすえとる瓢り那 李川
 名月や照る廣きる 海志上 紀六
 秋のや外猪れ座れ尻風も 左長
 橋まてとりさくり紙す月足か 令五
 冠きとく鶴鶴のむらや雑臥花 海宇
 畑エ美れ側へと搜らる 野菊哉 悟一
 孫小のよれ月免す言やけさ乃秋 兔明

腹うもち急く座乃の月足か 善夕

菑野よと

名月や湯蕪れうちも芋あゝん 其律
 海古れ種へやあゝるお柳 六阿
 子代うちよびききとく菊ふ竹の杖 路十
 花よと花と給よとゆら月見くれ 千箱
 移よ月ハららの杖や菊乃花 八亀
 よい抱と貯ひまけりなれ月 竹亭

煉乳汁道や梢う穴、あく 糸布

川の束も羊ハさけりその川 菊鬼

楓燭うまゝむ足もや後此月 青陸

情うく夜此明て来る月足ハ 其麦

初ノや裾工もの動く宵の経 坡立

多う出怒上るハ解 菊忠花 十阿

行秋やもるけのこぬ月れり 三笑

名月や露もせて竹此雪けき 五条坊

京橋治板



